

飯田町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

飯田西15号塚

2025年7月

アイラックホーム（株）

高松市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、飯田町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市飯田町に所在する「飯田西 15 号塚」の報告を収録した。
2. 発掘調査地および調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：高松市飯田町字小坂 625 番 2
調査期間：令和 7 年 1 月 9 日～31 日
調査面積：約 40 m²
3. 発掘調査は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 梶原 慎司および同課会計年度任用職員 磯崎 福子が担当し、整理作業は梶原が担当した。
4. 本報告書の執筆および編集は梶原が担当した。
5. 本報告書の標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中の方位は座標北を表す。
6. 遺構断面の注記の色調および土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
7. 本報告書の挿図として、高松市都市計画図 2,500 分の 1「No. 43, 44, 52, 53」を一部改変して使用した。
8. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

- 第1節 調査の経緯・・・・・・・・・・ 1
第2節 調査の経過・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

- 第1節 地理的環境・・・・・・・・・・ 2
第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章 調査の成果

- 第1節 調査方法・・・・・・・・・・ 5
第2節 塚の形状と層位・・・・・・・・ 5
第3節 I・II層の出土遺物・・・・・・ 7
第4節 石積み・・・・・・・・・・ 12
第5節 III層の出土遺物・・・・・・・・ 12

第Ⅳ章 まとめ・・・・・・・・・・ 16

挿 図 表 目 次

- 第1図 調査区位置図・・・・・・・・・・ 1
第2図 高松平野と遺跡の位置・・・・・・ 2
第3図 周辺の主要遺跡分布図・・・・・・ 4
第4図 飯田西 15号塚の平面図・・・・・・ 6
第5図 飯田西 15号塚の断面図・・・・・・ 7
第6図 I・II層の出土遺物①・・・・・・ 8
第7図 I・II層の出土遺物②・・・・・・ 9
第8図 I・II層の出土遺物③・・・・・・ 10
第9図 I・II層の出土遺物④・・・・・・ 11

- 第10図 石積み平面図・・・・・・・・・・ 13
第11図 石積み北面・西面立面図・・・・ 14
第12図 III層の出土遺物・・・・・・・・ 15
第13図 飯田西 14・15号塚の遺構配置・・ 17
第1表 土器観察表①・・・・・・・・・・ 18
第2表 土器観察表②・・・・・・・・・・ 19
第3表 瓦観察表・・・・・・・・・・ 20
第4表 石製品観察表・・・・・・・・・・ 20

写 真 図 版 目 次

- 図版 1 石積み①
図版 2 石積み②
石積み③
図版 3 石積み西面
石積み北面
図版 4 石積み平面オルソ画像
図版 5 石積み立面オルソ画像
図版 6 発掘調査直前の飯田西 15号塚
石造物検出状況
2018年当時の飯田西 15号塚
図版 7 石積み上面の土層断面（東西方向）①
石積み上面の土層断面（東西方向）②
石積み上面の土層断面（南北方向）①
図版 8 石積み上面の土層断面（南北方向）②
石積み上面の土層断面（南北方向）③
石積み上面の土層断面（南北方向）④
図版 9 石積み内部の土層断面（西側）①
石積み内部の土層断面（西側）②
石積み内部の土層断面（東西方向）

- 石積み内部の土層断面（南側）
石積み内部の土層断面（北側）①
石積み内部の土層断面（北側）②
完掘状況
調査状況
図版 10 I・II層出土土師質土器①
I・II層出土土師質土器②
図版 11 I・II層出土土師質土器③
I・II層出土灯明皿
I・II層出土備前焼とさな
図版 12 I・II層出土土師質土器④
I・II層出土軒丸瓦
I・II層出土軒瓦
図版 13 I・II層出土陶磁器
I・II層出土砥石
I・II層出土石造物
図版 14 III層出土土師質土器
III層出土陶磁器・瓦

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

当該地における宅地造成工事計画に際し、事業者から高松市教育委員会（以下、市教委）に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があった。その結果、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「飯田西15号塚」であることが確認された。また、平成30年3月には塚の頂部に中世の石造物が露出していることを市教委が確認しており、隣接する「飯田西14号塚」から12～13世紀の五輪塔石材が出土している（高松市教委編2020）ことから、発掘調査の必要性を考慮し事業者と市教委との協議が開始された。



第1図 調査区位置図 (S=1/2,500)

その後、令和6年12月23日付けで事業者から文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）へ進達したところ、同年12月27日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう行政指導がなされた。これを受けて市教委は事業者と再度協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意し、令和7年1月6日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結した。これに基づき、市教委は当該地において発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は令和7年1月9日から開始し、24日に終了した。調査の主な工程は以下のとおりである。

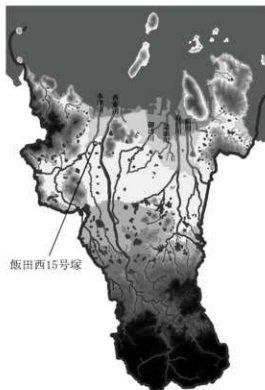
- | | |
|----------|---------------------------------|
| 1月9日 | 道具の搬入および塚の測量 |
| 1月10～20日 | 塚を掘削し石積みを検出、石積み上面までの掘削、塚断面の図化作業 |
| 1月21日 | 石積みの写真測量 |
| 1月22～24日 | 石積み内部の掘削、塚断面の図化作業 |
| 1月30～31日 | 道具の撤収および土器洗浄、土砂の搬出 |

整理作業は令和7年4月1日から開始し、同年7月30日に終了した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。現在高松平野には、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、石清尾山山塊を挟み香東川、本津川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしている。現在の香東川は近世初頭に生駒家の家臣西嶋八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓から平野中央部を東北流する主流路が存在していた。この旧主流路は、現在では水田地帯および市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りを留めている。



第2図 高松平野と遺跡の位置

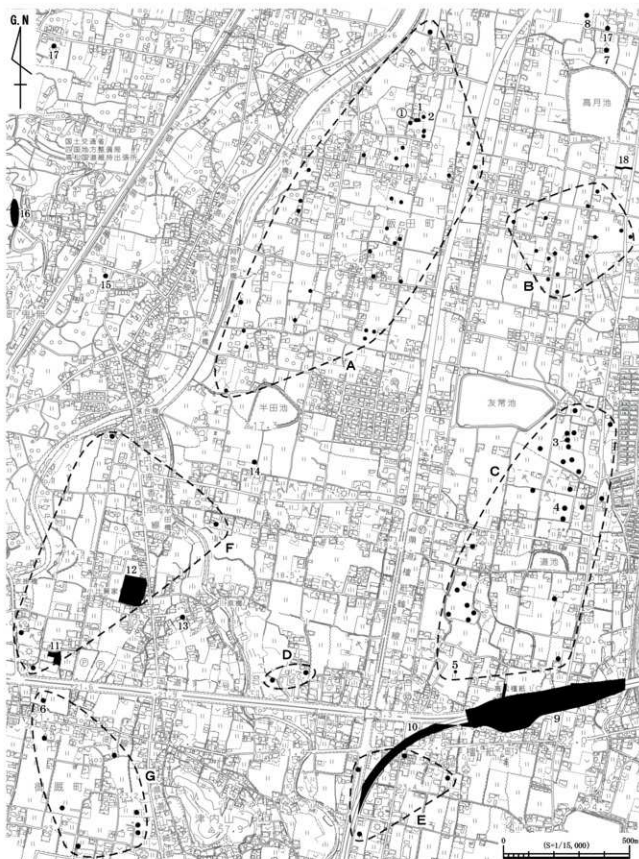
高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野への流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。これらのため池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。

飯田西15号塚が所在する飯田町は、沖積平野である高松平野の西部に位置し、周辺の標高は約10mである。本地域は香東川と本津川の2本の北流する河川に挟まれた微高地上に立地し、局所的には西側の本津川によって形成された自然堤防と扇状地の境界付近にあたる。地形は西側へ向かうほど急傾斜し、東側へ向かうほど緩やかに傾斜している。このように地形が変化する境界域に位置するため、周辺住民からの聞き取りによると、調査地から西側では現地表から浅い地点で礫層に達する一方、少し東へ離れると粘土層が厚く堆積するとのことであった。西側に分布する礫層は自然堤防形成時に河川が運搬した堆積層に相当し、東側の粘土層は扇状地性低地に由来する堆積層に対応すると考えられる(高上2020)。飯田西15号塚は多数の円礫を集積して形成されていたが、こうした石材は上述した地形の特徴により近隣で容易に採取できたと推察される。

第2節 歴史的環境

高松平野西部（香東川以西の高松市域）における中世以前の歴史的環境については、梶原慎司（2022）によって論じられている。また、近世以降に編纂された『南海通記』などの二次史料には中世から近世にかけての飯田町周辺に関する記載が含まれており、それらの内容は高上拓（2020）によって整理されている。

飯田町周辺には多数の塚が分布しており、その一部については発掘調査が実施されている（第3図）。飯田西15号塚に隣接する**飯田西14号塚（1）**の調査では、盛土内部から中世（12～13世紀）に構築されたL字形の石囲区画が検出された。さらに、その墳丘上面からは倒壊した状態の五輪塔が出土しており、形態的特徴から12～13世紀に帰属するものと考えられている。また、中世から近代にかけての遺物を包含する盛土からは中世に帰属する土師質の骨蔵器が出土している（高松市教委編2020）。飯田西14号塚の北東約10mに位置する**飯田西13号塚（2）**の調査では遺構は検出されなかったものの、中世から近代にかけての遺物を包含する盛土から14世紀に帰属する五輪塔が出土している（高松市教委編2020）。**紙漣5号塚（3）**の調査では、盛土内部から近世（18世紀以降）に構築されたコ字形の石囲区画が検出された。この石囲区画内には、板状に加工された凝灰岩を用いて正方形に組まれた石組遺構が認められた。また、この石組遺構の周囲には15～16世紀の凝灰岩製石造物が多数散在していた。さらに、近世の石囲区画の下層からは中世のL字形の石囲区画が検出されており、上層から出土した中世の石造物はこの石囲区画内に造立されていたものと推定されている。これらの石造物の年代から、**紙漣5号塚**は15世紀前半に形成されたと考えられている（高松市教委編2021）。**紙漣14号塚（4）**は現状では墳丘が消滅しており、その基底部に対して発掘調査が実施された。その結果、長軸約1.1m、短軸約0.7mの土坑が検出され、内部から人骨が出土した。この土坑は、紙漣14号塚に伴う埋葬施設であった可能性が高いと考えられている。出土遺物の年代から15世紀末～16世紀前半に構築されたと推定されている（高松市教委編2025）。**紙漣25号塚（5）**の調査では、盛土内部から近世（17世紀後半以降）に構築されたL字形の石囲区画が検出された。加えて、塚の頂部には陶器製の壺を据えた土坑が設けられており、壺の内部には寛永通宝の孔に和釘を差し込んだものが8点納められ、その上に土師質の蓋を載せ、さらに石材が重ねられるという埋納遺構が確認された（高松市教委編2020）。**御殿南部1号塚（6）**の調査では、墳丘内部からは遺構が検出されなかったが、塚の基底部において方形の区画溝が確認された。この溝は塚の範囲を区画する目的で掘削されたものと考えられ、塚は中世以降に形成された可能性が高いと推定されている（高松市教委編2025）。**相作馬塚古墳（7）**の調査では、盛土内部から14世紀前半に構築された3基のコ字形の石囲区画が検出された。石囲区画2の内部には原位置を保った状態の集石墓が確認され、その中央には土師質の骨蔵器1点および甕2点が据えられていた。甕の内部には多量の骨片が含まれており、細かく粉砕されていたことから火葬骨を納めた骨蔵器であったと考えられている（高松市教委編2015, 2017）。以上の発掘調査成果から、高松平野西部においては中世から近世にかけて石囲区画を伴う墓域が複数造営されていたことが明らかとなった。



①：飯田西15号塚 1：飯田西14号塚 2：飯田西13号塚 3：紙漉5号塚 4：紙漉14号塚 5：紙漉25号塚 6：御殿南部1号塚
 7：相作馬塚古墳 8：相作牛塚古墳 9：中森遺跡 10：八幡遺跡 11：正勝遺跡 12：小比賀家住宅 13：御殿大塚
 14：半田池南小塚 15：鬼塚古墳 16：桃太郎神社西遺跡 17：(塚) 18：飯田町東青木遺跡
 A：飯田西1～4, 7～37号塚 B：青木1～14号塚 C：紙漉1～26号塚 D：大將家1, 2号塚 E：檀紙南部1～4, 12号塚
 F：御殿1, 2, 4, 5号塚 G：御殿南部1～8号塚

第3図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/15,000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査方法

本調査では、発掘作業の全行程を人力により実施した。初めに、塚全体を北西・北東・南西・南東の四区に区分し、土層断面図を作成するため東西および南北方向に畦を残しつつ各区を順次掘削した。掘削を進めると塚頂部から約1 m下までは、ビニールやガラス、鉄片、瓦片、土師質土器片、陶磁器片、貝類等を含む現代に築造された層であることが明らかになった。これらの層を除去したところ、平面L字形の石積みを検出した。そのため、塚の土層断面を石積み上面まで図化した後、畦を石積み上面まで掘削した。石積みの内部は硬混じりシルト層で構成されており、その上面において遺構検出を試みたが遺構は確認されなかった。石積みの平面図および立面図の作成にあたっては、写真測量を実施しオルソ画像を作成した。なお、写真測量業務は株式会社四航コンサルタントに委託した。写真測量終了後、再度工区を設定し同一箇所を畦を残しながら地山上面に至るまで掘削を進めた。その後、石積み上面までの既存土層断面図に地山までの土層断面を追加記載した。図化完了後に畦を掘削し、地山上面で遺構検出を行ったが遺構は確認されなかった。

記録に際しては、基準点を基に20分の1縮尺で平面図および断面図を作図した。写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（Nikon D5100）を用いた。

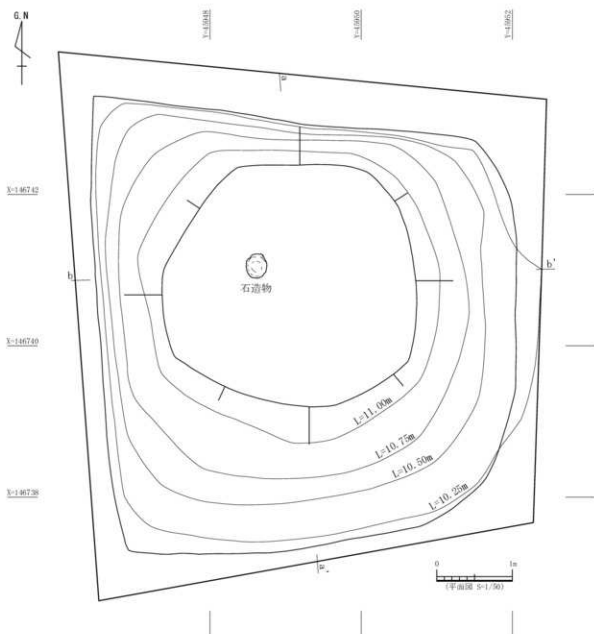
第2節 塚の形状と層位（第4,5図）

飯田西15号塚に隣接する土地は近年造成されており、発掘調査開始時点では塚の四方が擁壁に囲われていた。このため、現況における塚の平面形状は方形を呈しているが、擁壁が設置される前の平面形状は円形であった（高松市教委編2024）。調査時の飯田西15号塚の規模は南北約6.0 m、東西約5.7 mである（第4図）。塚の頂部は円形状を呈し、南北約3.2 m、東西約3.4 mの範囲を有する。頂部の標高は約11.25 mであり、地山上面の標高が約9.9～10.1 mであることから、塚の現存高は約1.2～1.4 mである。

擁壁が設置される前に、飯田西15号塚の周囲では範囲確認を目的とした確認調査を実施している（高松市教委編2024）。塚の北側に南北方向のトレンチ、西側に東西方向のトレンチを設定し遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。そのため、周溝など塚に関連する周辺施設は伴わないと考えられる。

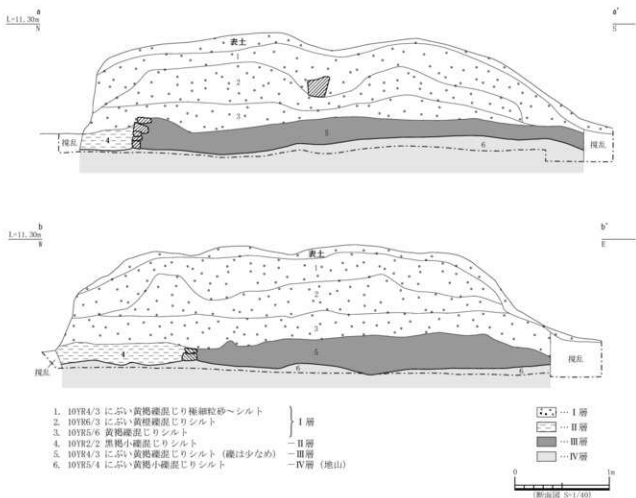
隣接する飯田西14号塚の調査を実施した平成30年3月当時には、飯田西15号塚の頂部において中世の石造物が露出していることを市教委では確認している（高松市教委編2020）。その後、塚上に繁茂していた樹木の伐採および伐根作業の過程で生じた窪みに石造物が転落したと考えられ、今回の調査では表土下約数cmの位置で石造物（第9図47）を再確認した。

塚を構成する土層は、土質および包含する遺物の違いに基づき大きく4層に区分される（第5図）。1層は礫を多量に含むにがい黄褐色～にがい黄橙色シルト層であり、表土および1～3層に相当する。塚の頂部から約1 mにわたり堆積しており、ビニールやガラス片など近現代の



第4図 飯田西 15 号塚の平面図 (S=1/50)

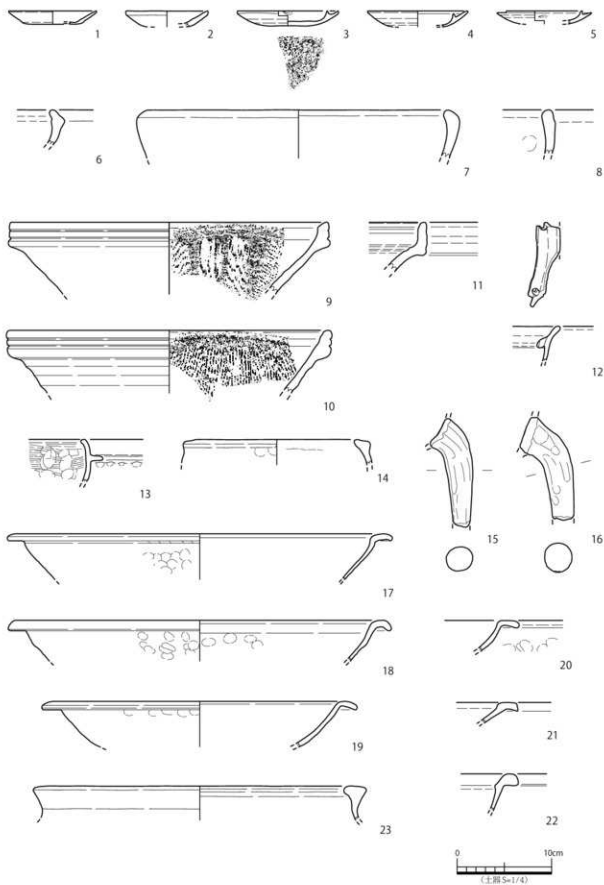
遺物を包含していることから現代に造成された層であると考えられる。Ⅱ層は小礫を含む黒褐色シルト層で、4層に相当する。石積みの外側に約0.2m堆積している。陶磁器片などの遺物が出土した一方でビニールやガラス片は認められなかったことから、近世後半～近代に構築された層であると推定される。Ⅲ層は小礫を含みかつしまりの強いにぶい黄褐色シルト層であり、5層に相当する。礫の含有量は上層よりも少なく、石積みの内側に約0.2～0.4m堆積している。Ⅲ層からは陶磁器片などの遺物が出土しており、近世後半に石積みとあわせて構築されたものと考えられる。Ⅳ層は小礫を含むにぶい黄褐色シルト層で、6層に相当する。Ⅳ層は地山である。これらの土層は、Ⅳ層→Ⅲ層→Ⅱ層→Ⅰ層の順に堆積したものである。遺構検出は、Ⅲ層上面およびⅣ層上面において実施した。



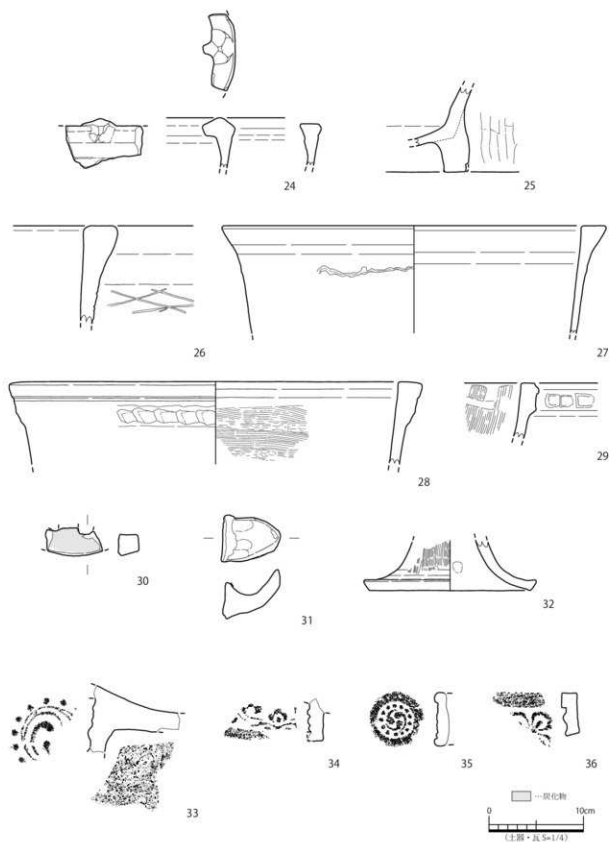
第5図 飯田西15号塚の断面図 (S=1/40)

第3節 I・II層の出土遺物 (第6～9図)

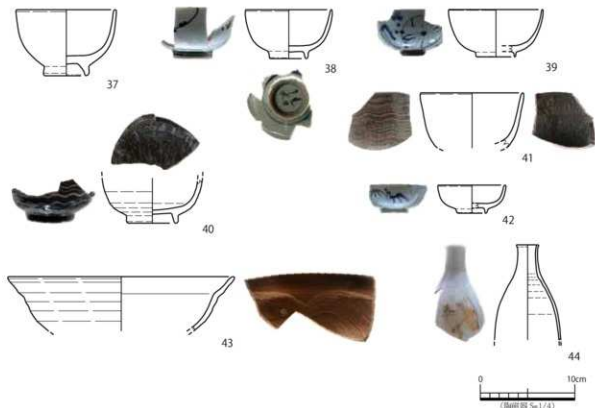
1・2は土師質小皿である。どちらも底部がほとんど残存していないため切り離し技法は不明である。3～5は備前焼の灯明受皿である。高松城西の丸地区では18世紀前半以降に備前焼の灯明皿が出現することが指摘されているため(佐藤2003)、18世紀前半以降と考えられる。6～8は土師質鉢の口縁部である。17世紀前半である。9～11は備前焼の播鉢である。9は摺り目の間隔が十分に置かれ、口縁帯外面の凹線は2条であることから17世紀前半(近世2a期)のものである(乗岡2002)。10は摺り目の間隔が相当詰まっており口縁帯外面の凹線は2条である一方で、本格的な塗土がないことから17世紀中葉(近世2b期)のものである(乗岡2002)。11は口縁が垂直に立ち上がり、口縁帯外面の凹線は認められないことから15世紀後半(中世5期)のものである(乗岡2017)。12は土師質鍋の口縁部である。外面に煤が付着している。17世紀前半である。13は土師質足釜の口縁部である。口縁部および鏝部の端面は丸くナゲられ、外面には煤が付着している。足釜は高松平野では13世紀から17世紀初頭にかけて認められるが、13は鏝部が長いことから中世のなかでもやや古相である。14は土師質把手付鍋の口縁部である。17世紀前半である。15・16は土師質足釜の脚部である。17～20は土師質焙烙である。外面に煤が付着している。内耳が残存していないため詳細な型式は不明で、



第6図 I・II層の出土遺物① (S=1/4)

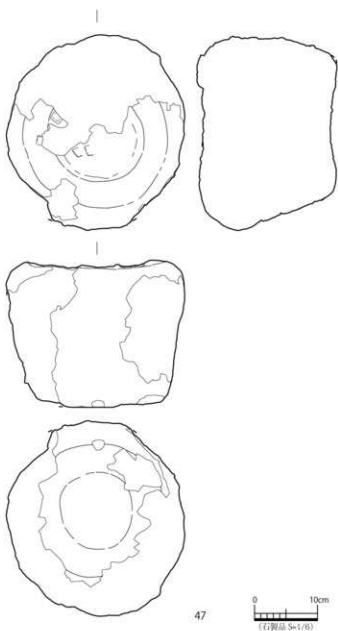
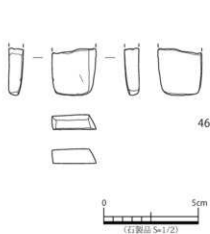
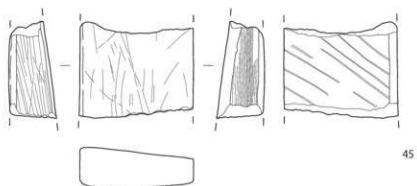


第7図 I・II層の出土遺物② (S=1/4)



第8図 I・II層の出土遺物③ (S=1/4)

口縁部形態から18世紀前半～19世紀後半のなかに位置づけられる(佐藤2001)。21・22は瓦質焙烙である。どちらも口縁部形態から19世紀末である(佐藤2001)。23は土師質甕の口縁部である。口縁部上面に煤が付着している。24は土師質七厘と考えられる。25は土師質七厘または焔炉の脚部である。26は土師質井側である。頸部外面に格子状の刺突が連続する文様帯が認められる。27～29は土師質大甕である。28は頸部外面、29は口縁部外面に強いナデまたはケズリが連続する文様帯が認められる。28は口縁部上面に煤が付着している。30は七厘部品のさなである。31は把手である。32は弥生土器の高杯の脚部である。33は三巴文系軒丸瓦である。巴尾部が細長く、外区に小ぶりの珠文が推定14～16個伴う。近世のなかでも古相のものである。34は半裁花菱文系軒平瓦である。35は軒椀瓦の小丸瓦当である。内区に三巴文をもち、外区には珠文が13個伴う。36は瓦質の器種不明である。隅部が鋭角になっており、花文が半裁された後に焼成されている。37～41は陶器または磁器の碗である。37はにぶい黄橙色を呈する精良な胎土で全面に透明釉を施す。38・39は肥前系である。38は外面に草花文、高台内に崩し字をもつ。39は外面に菊花文と草花文が描かれる。40は外面に白色の波状文、内面に打状の刷毛目文をもち、透明釉を施す。41は外面に白色の刷毛目文、内面に打状の刷毛目文をもち、透明釉を施す。42は肥前系磁器小杯で、外面に笹葉文をもつ。43は陶器鉢である。外面はにぶい黄橙色を呈する精良な胎土に透明釉を施す。内面は口縁下から橙色の刷毛目文が描かれる。44は磁器瓶である。外面に金色の不明文様と「記」の文字が描かれており、これらは転写によるものと考えられる。45・46は砥石である。ともに正面・側面・背面が使用されている。石材は不明である。45の背面には斜行する凹線が数条刻まれている。47は五



第9図 I・II層の出土遺物④ (S=1/2・1/6)

輪塔の水輪である。上面および下面は当初の形態が保持されているが、側面部は大きく破損しており原形をほとんど留めていない。石材は凝灰岩である。松田朝由氏（大川広域行政組合）のご教示によると、この石造物は15～16世紀に属するもので高松南部の日妻山およびその周辺の石材である可能性が高い。

所属時期 I層にはビニールやガラス片など近現代の遺物を包含していることから、遺物の上限年代は現代に比定される。出土遺物の大部分は近世に属する土師質土器や陶磁器類、瓦類で占められており、近世期を通じた周辺の土地利用が認められる。一方で、備前焼播鉢（11）や土師質足釜（13）、五輪塔水輪（47）といった中世に遡る資料も少数ながら確認された。本遺跡に隣接する飯田西14号塚をはじめ五輪塔を伴う塚が周辺に複数分布する状況を併せて考慮すると、本遺跡周辺には中世期の集落が存在した可能性が高い。また、古代以前の土器（31・32）もわずかに確認された。II層には時期が判明する遺物がほとんど出土せず、図化できたのは土師質大甕（28）のみであった。ビニールやガラス片などは出土しなかったことから、近代以前に形成されたものと考えられる。

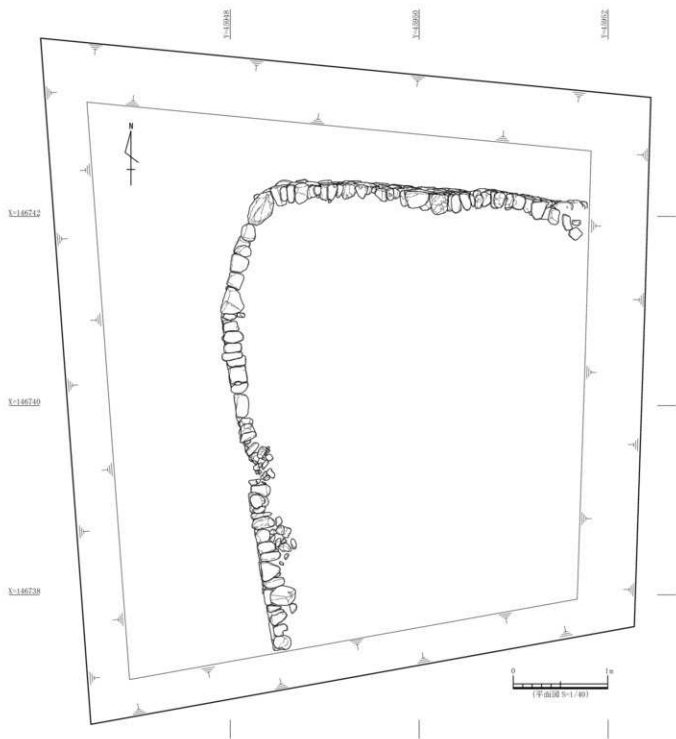
第4節 石積み（第10,11図）

I・II層を取り除くと、平面L字形の石積みを検出した（第10図）。北面は約4m、西面は約5mの長さを測り、隅丸状を呈する。北面は残存状況が良好なところで6段の石積みが残されており、高さは約0.5mである（第11図）。北西隅は削平が著しく石積みは1段のみが残されていなかった。西面は残存状況が良好なところで4段の石積みが残されており、高さは約0.35mである（第11図）。石積みを構成する石材は、最大幅約0.3m、最大高約0.2mの円礫および角礫であり、加工痕は認められなかった。この石積みは調査区外に向かって延びていたが、周辺の開発によって削平され本遺構のみが残存したものと考えられる。

石積み上面で遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。石積みの内部を掘削した結果、近世の土師質土器をはじめとする遺物が出土した（出土遺物の詳細については次節参照）。これらの出土遺物に基づくと、石積みは18世紀中頃に以降に構築されたことが判明した。石積みの形態的特徴と周辺に同様の石積みを伴う塚が複数分布する状況を考慮すると、本遺構は方形の石垣区画の一角に相当し、墓地等の基壇の一部として機能していた可能性が高い。

第5節 III層（石積み内部）の出土遺物（第12図）

48は土師質鉢の口縁部である。17世紀前半である。49は土師質羽釜である。形態から17世紀後半から18世紀である。50は土師質足釜の脚部である。51～55は土師質焙烙である。外面に煤が付着している。53を除いて内耳が残存していないため詳細な型式は不明で、51・52・54・55は口縁部形態から18世紀前半～19世紀後半のなかに位置づけられる。53は口縁部形態と内耳形態からAⅠ-2型式で1740～1770年代に位置づけられる（佐藤2001）。56は土師質甕の口縁部である。57は丸瓦である。58・59は陶器碗である。58は浅黄色を呈する精



第10図 石積み平面図 (S=1/40)

北面



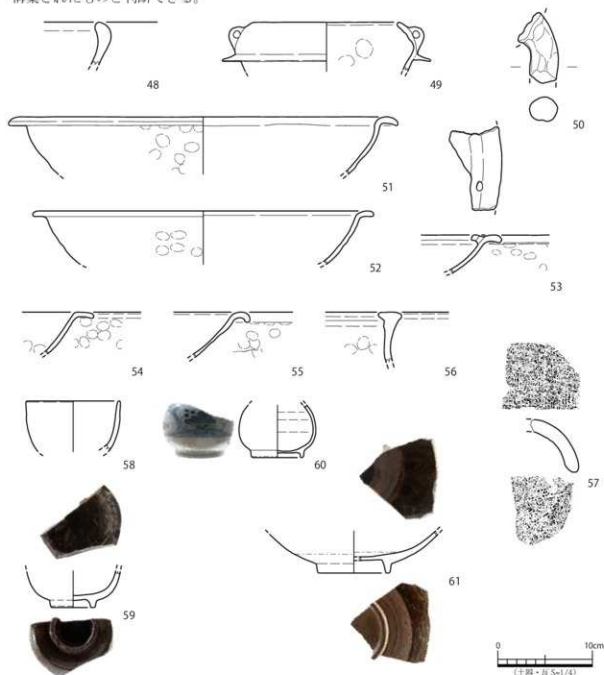
西面



第 11 図 石積み北面・西面立面図 (S=1/20)

良な胎土で全面に透明釉を施す。59 は内面に打状の刷毛目文をもち、透明釉を施す。60 は胴部上半から頸部にむかってすぼまっていることから瓶であると考えられる。外面には白釉と草花文が施される一方、内面は無釉である。61 は陶器鉢である。外面は高台部から腰部にかけては無釉で、胴部には緑釉が施される。内面は一部を除いて底部が無釉で、底部から口縁部にかけては緑釉と刷毛目文が施される。

所属時期 出土した遺物の大半は近世に属するものである。ただし、時期比定が可能な遺物は少なく、18 世紀中頃に位置づけられる土師質焙烙 (53) が詳細な時期を特定できる資料である。18 世紀中頃以降に属すると考えられる遺物は認められないため、石積みは 18 世紀中頃以降に構築されたものと判断できる。



第 12 図 III 層の出土遺物 (S=1/4)

第Ⅳ章 まとめ

今回の発掘調査では、塚の内部から18世紀中頃以降に構築された石積みを検出した。石積みは平面L字形で、北面は約4m、西面は約5mの長さを測る。残存状況が良好なところでは6段の石積みが残されており、高さは約0.5mであった。構築当初は石積みが四周を廻る方形石囲いであったと考えられ、墓地等の基壇として機能していた可能性が高い。石積みの内部から遺構は検出されなかった。

第13図は、飯田西14号塚および15号塚における遺構配置を示したものである。飯田西15号塚の石積み東端から東に約5.5mの地点で飯田西14号塚の方形石囲い遺構が検出されている。これらの位置関係に基づくと、飯田西15号塚の石積みが東西方向に延長し得る距離は最大でも5mに満たないと判断できる。

以上の調査成果から、調査地周辺では中世から近世にかけての墓域が複数造営されていたことが再確認された。調査地周辺には未調査の塚が多数分布していることから、今後も継続的に発掘調査を行いその構造を明らかにすることが求められる。

本書の参考文献

- 梶原慎司 2022『中世以前の香西』『勝賀城跡Ⅲ—総括報告書（考察編）—』高松市埋蔵文化財調査報告第239集，高松市教育委員会，8-14頁
- 佐藤竜馬 2001『瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙』『四国と周辺の土器—焙烙の生産と流通—』，徳島大学総合科学部歴史学研究室・関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと，1-90頁
- 佐藤竜馬 2003『近世在地土器の検討』『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ 第1分冊』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター，204-213頁
- 高上拓 2020『遺跡の位置と環境』『飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚・紙漣25号塚』高松市埋蔵文化財調査報告第213集，高松市教育委員会，1-4頁
- 高松市教育委員会編 2015『相作馬塚』高松市埋蔵文化財調査報告第157集，高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2017『相作馬塚古墳Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第185集，高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2020『飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚・紙漣25号塚』高松市埋蔵文化財調査報告第213集，高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2021『紙漣5号塚』高松市埋蔵文化財調査報告第225集，高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2024『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第248集，高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 2025『高松市内遺跡調査』高松市埋蔵文化財調査報告第255集，高松市教育委員会
- 乗岡実 2002『近世備前焼播鉢の編年表』『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会文化財課・岡山市埋蔵文化財センター，190-197頁
- 乗岡実 2017『戦国時代の備前焼編年』『東洋陶磁』第46号，5-21頁



X=146712.0

X=146714.0

X=146720.0

Y=43294.8

Y=43296.0

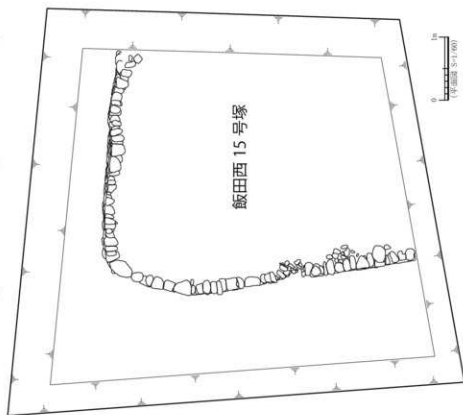
Y=43297.2

Y=43298.4

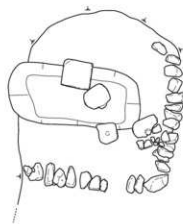
Y=43299.6

Y=43300.8

Y=43302.0



飯田西 14 号塚



第 13 図 飯田西 14・15 号塚の遺構配置 (S=1/60)

第1表 土器観察表①

採掘 番号	報告書 番号	遺構名/ 層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調	胎土	焼成	備考	
						口径	底径	器高	外面	内面					
6	1	南東部 第3層	土師質 土器	小壺	口縁部 ～底部	Ø 21	16.6	1.4	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	[外面] 7.5386/6焼 [内面] 7.5386/6焼	緑 石・赤色粒含む	良		
6	2	南東部 第3層	土師質 土器	小壺	口縁部 ～胴部	Ø 6.6	—	[1.7]	回転ナデ	回転ナデ	[外面] 7.5386/6焼 [内面] 7.5386/6焼	緑 石・赤色粒含む	良		
6	3	南東部 第3層	陶部	灯明 受皿	口縁部 ～底部	(10.6)	(4.2)	1.6	回転ナデ 底面：回転糸切 り	回転ナデ	[外面] 2.5385/4明赤焼 [内面] 2.5384/6赤焼 [胎土] 7.5387/6焼	緑	焼面焼 面縁：半月 状1箇所 口縁部：僅 付着		
6	4	南東部 第1層	陶部	灯明 受皿	口縁部 ～胴部	(10.6)	—	[1.7]	回転ナデ	回転ナデ	[外面] 10.84/3赤焼 [内面] 2.5383/3赤赤焼 [胎土] 2.5384/3に5い・赤焼	緑	焼面焼		
6	5	南東部 第3層	陶部	灯明 受皿	口縁部 ～胴部	Ø 6.0	—	[1.4]	回転ナデ 底面：回転糸切 り	回転ナデ	[外面] 2.5384/3に5い・赤焼 [内面] 2.5385/3に5い・赤焼 [胎土] 5.5/0焼	緑	焼面焼 面縁：アー チ状1箇所 口縁部：僅 付着		
6	6	北東部 第2層	土師質 土器	鉢	口縁部	—	—	[3.7]	ナデ	ナデ	[外面] 10.98/4浅黄焼 [内面] 10.98/4浅黄焼	青	1mm以下の石葉・長 石・雲母・赤色粒 含む	良	
6	7	南東部 第3層	土師質 土器	鉢	口縁部	(31.4)	—	[5.1]	ナデ	ナデ	[外面] 5386/6焼 [内面] 5386/6焼	青	1.5mm以下の石葉・ 長石・雲母・赤色 粒含む	良好	
6	8	南東部 第2層	土師質 土器	鉢	口縁部	—	—	[4.6]	ヨコナデ	ヨコナデ	[外面] 5387/6焼 [内面] 7.5387/6焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良好	
6	9	南東部 第1層	陶部	種鉢	口縁部	(33.4)	—	[7.6]	回転ナデ・回転 2条	回転ナデ・回転 2条	[外面] 2.5385/4明赤焼 [内面] 2.5385/4明赤焼 [胎土] 5385/4に5い・赤焼	青	焼面焼		
6	10	南東部 第1層	陶部	種鉢	口縁部	(33.8)	—	[6.6]	回転ナデ・回転 2条	回転ナデ・回転 2条	[外面] 5384/9赤焼 [内面] 5384/6赤焼 [胎土] 5384/4に5い・赤焼	青	焼面焼		
6	11	南東部 第1層	陶部	種鉢	口縁部	—	—	[5.2]	回転ナデ	回転ナデ	[外面] 2.5384/3に5い・赤焼 [内面] 2.5384/1赤焼 [胎土] 2.5383/2赤赤焼	緑	焼面焼		
6	12	北東部 第2層	土師質 土器	瀝	口縁部	—	—	[3.7]	ナデ	ナデ・指押さ え	[外面] 10.984/1焼灰 [内面] 10.986/3に5い・黄焼	青	1mm以下の石葉・長 石・雲母・赤色粒 含む	良好	穿孔2箇所 残存 外面：僅付 着
6	13	北東部 第2層	土師質 土器	足冴 ～胴部	口縁部	—	—	[4.4]	ナデ・指押さ え	ナデ・指押さ え・ハケ目	[外面] 52/黒 [内面] 52/黒	青	2mm以下の石葉・長 石・角閃石含む	良	外面：僅付 着
6	14	北東部 第2層	土師質 土器	把手 付瀝	口縁部	—	—	[2.7]	指押さえ・摩滅	摩滅	[外面] 10.98/4浅黄焼 [内面] 10.98/4浅黄焼	青	1mm以下の石葉・長 石・雲母・角閃 石・赤色粒含む	良	
6	15	南東部 第1層	土師質 土器	足冴	脚部	長さ (11.5)	幅 2.8	厚 2.6	ナデ	ナデ	[外・内面] 10.986/4に5い・ 黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良	
6	16	北東部 第2層	土師質 土器	足冴	脚部	長さ (10.9)	幅 2.9	厚 3.1	ナデ・指押さ え	ナデ・指押さ え	[外・内面] 10.987/3に5い・ 黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良	
6	17	北東部 第3層	土師質 土器	燈 籠	口縁部 ～胴部	(40.8)	—	[4.8]	ヨコナデ・指押 さえ	ヨコナデ	[外面] 2.532/1黒 [内面] 10.986/4に5い・黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・角閃石含む	良	外面：僅付 着
6	18	北東部 第3層	土師質 土器	燈 籠	口縁部 ～胴部	(40.6)	—	[4.3]	ヨコナデ・指押 さえ	ヨコナデ	[外面] 10.987/7.3黒 [内面] 10.987/2に5い・黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・角閃石含む	良	外面：僅付 着
6	19	南東部 第3層	土師質 土器	燈 籠	口縁部 ～胴部	(33.4)	—	[4.8]	ヨコナデ・指押 さえ	ヨコナデ	[外面] 10.985/2浅黄焼 [内面] 10.985/1焼灰	青	2mm以下の石葉・長 石・雲母・赤色粒 含む	良	外面：僅付 着
6	20	北東部 第3層	土師質 土器	燈 籠	口縁部	—	—	[4.3]	ヨコナデ・指押 さえ	ヨコナデ	[外面] 10.987/7.3黒 [内面] 10.985/2浅黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良	外面：僅付 着
6	21	南西部 第2層	灰質土器	燈 籠	口縁部	—	—	[2.1]	摩滅	ヨコナデ	[外面] 55/灰 [内面] 54/灰	緑 石・赤色粒含む	良好		
6	22	北西部 第1層	灰質土器	燈 籠	口縁部	—	—	[3.9]	ナデ	ヨコナデ	[外面] 53/焼灰 [内面] 53/焼灰	緑 石・赤色粒含む	良好		
6	23	南東部 第3層	土師質 土器	壺	口縁部	(32.6)	—	[3.6]	ヨコナデ	ヨコナデ	[外面] 7.5385/4に5い・焼 [内面] 7.5384/4焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良好	口縁～内 面：僅付着
7	24	南東部 第2層	土師質 土器	七 曜	口縁部	—	—	[5.3]	ヨコナデ・指押 さえ	ヨコナデ	[外面] 10.986/3に5い・黄焼 [内面] 10.986/2に5い・黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・角閃石含む	良好	
7	25	南東部 第1層	土師質 土器	燈 籠	脚部	—	—	[6.9]	ナデ	ナデ	[外面] 7.5387/6焼 [内面] 7.5387/4に5い・焼	青	2mm以下の石葉・長 石・赤色粒含む	良好	
7	26	北西部 第4層	土師質 土器	片側 口縁部	—	—	—	[10.4]	ナデ・ヘラ施文	ヨコナデ	[外面] 10.986/4に5い・黄焼 [内面] 10.986/4に5い・黄焼	青	2mm以下の石葉・長 石・金雲母・角閃 石・赤色粒含む	良好	
7	27	南西部 第1層	土師質 土器	大壺	口縁部	(40.6)	—	[11.3]	ヨコナデ	ヨコナデ	[外面] 7.5386/4に5い・焼 [内面] 10.986/4に5い・焼	青	1mm以下の石葉・長 石・雲母・角閃石 含む	良好	
7	28	北東部 第4層	土師質 土器	大壺	口縁部	(43.6)	—	[8.7]	ヨコナデ・沈 腐・押圧文様	ハケ目	[外面] 7.5386/6焼 [内面] 7.5385/4に5い・焼	青	2mm以下の石葉・長 石・金雲母・赤色 粒含む	良好	口縁～内 面：僅付着

第2表 土器観察表②

博覧 番号	報告書 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	高さ	外面	内面				
7	29	北西部 表土層	土師質 土器	大甕	口縁部	—	—	[5.8]	コナナ・押圧 文様部	ハナ目	[外面]10YR6/4にぶい黄褐色 [内面]10YR6/4にぶい黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
7	30	北東部 第1層	陶器	七葉 部品 (ひな)	長さ	[5.2]	幅	[5.8]	ナデ	ナデ	[胎土]2.5YR5.6明赤褐色 [釉薬]M.灰黒	やや 粗	1.5m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	上面：炭化 物付着
7	31	南東部 第3層	土師質 土器	把手	長さ	[6.2]	幅	[5.0]	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	[外・内面]10YR7/4にぶい黄褐色	青	1.5m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
7	32	南西部 第3層	赤生土器	高杯	脚部	—	[17.0]	[5.3]	回転ナデ・ハナ目	ナデ・指押さえ	[外面]2.5YR6.6褐色 [内面]2.5YR6.6褐色	青	1m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
8	37	南東部 第1層	陶器	甕	口縁部 ～底部	[10.4]	4.3	7.0	施釉	施釉	[胎土]10YR7/4にぶい黄褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]一	灰		
8	38	南西部 第1層	磁器	甕	口縁部 ～底部	[9.0]	4.0	5.2	施釉・草花文・ 雲母本	施釉	[胎土]5YR6.6褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]緑10Y3/2オ リーブ系	緑		肥前系
8	39	北東部 第2層	磁器	甕	口縁部 ～底部	[9.8]	[4.0]	5.0	施釉・草花文・ 雲母本	施釉	[胎土]10YR8/1灰白 [釉薬]透明 [呉須・上絵]黄褐色	緑		肥前系 高台内に磨 じ字
8	40	北東部 第3層	陶器	甕	胴部 ～底部	—	[5.2]	[4.8]	施釉・波状文	施釉・打伏の網 毛目文	[胎土]10YR7/4にぶい黄褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]2.5YR6/1灰白	灰		
8	41	北東部 第2層	陶器	甕	口縁部 ～底部	[10.8]	—	[5.8]	施釉・網毛目文	施釉・打伏の網 毛目文	[胎土]2.5YR6/4にぶい黄褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]2YR6/2灰白	灰		
8	42	北東部 第2層	磁器	小杯	口縁部 ～底部	[7.0]	[3.0]	3.0	施釉・雲母文	施釉	[胎土]10YR8/1灰白 [釉薬]透明 [呉須・上絵]黄褐色	緑		肥前系
8	43	北東部 第3層	陶器	鉢	口縁部 ～胴部	[24.0]	—	[5.7]	施釉	施釉・網毛目文	[胎土]10YR7/4にぶい黄褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]10YR8/3浅黄褐色	灰		
8	44	北東部 第3層	磁器	瓶	口縁部 ～胴部	2.3	—	[10.0]	施釉・不明文様	施釉	[胎土]5YR6/1灰白 [釉薬]透明 [呉須・上絵]金	灰		
12	48	北東部 第5層	土師質 土器	鉢	口縁部	—	—	[4.5]	摩滅	回転ナデ	[外面]10YR6.6褐色 [内面]5YR6.6褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良
12	49	北西部 第5層	土師質 土器	甕	口縁部 ～胴部	[15.2]	—	[5.2]	ナデ	ナデ・指押さえ	[外面]2.5YR5.6明赤褐色 [内面]10YR6/3にぶい黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
12	50	北東部 第5層	土師質 土器	足鉢	脚部	長さ	[7.5]	幅	2.9	ナデ	[外・内面]10YR6/4にぶい黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
12	51	北東部 第5層	土師質 土器	燈台	口縁部 ～胴部	[41.2]	—	[6.1]	ナデ・指押さえ	ナデ	[外面]10YR4/2灰黄褐色 [内面]2.5Y4/1黄褐色	青	1m以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	外面：煤付 着
12	52	北東部 第5層	土師質 土器	燈台	口縁部 ～胴部	[36.0]	—	[5.6]	ナデ・指押さえ	ナデ	[外面]2Y2/2黒 [内面]2.5Y4/1黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	外面：煤付 着
12	53	北東部 第5層	土師質 土器	燈台	口縁部 ～胴部	—	—	[4.0]	指押さえ・摩滅	ナデ・摩滅	[外面]10YR4/3にぶい黄褐色 [内面]10YR6/4にぶい黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	外面：煤付 着
12	54	北東部 第5層	土師質 土器	燈台	口縁部 ～胴部	—	—	[4.4]	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	[外面]10YR4/1褐色 [内面]10YR5/1褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	外面：煤付 着
12	55	北東部 第5層	土師質 土器	燈台	口縁部 ～胴部	—	—	[4.8]	ナデ・指押さえ	コナナ	[外面]10YR4/1褐色 [内面]10YR6.2/6黄褐色	青	1m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	外面：煤付 着
12	56	北東部 第5層	土師質 土器	甕	口縁部	—	—	[5.4]	ナデ	ナデ・指押さえ	[外面]2.5YR6/4にぶい黄褐色 [内面]2.5YR6/4にぶい黄褐色	青	2m以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む	良
12	58	北東部 第5層	陶器	甕	口縁部 ～底部	[9.8]	—	[5.4]	施釉	施釉	[胎土]2.5Y7/3浅黄褐色 [釉薬]透明 [呉須・上絵]一	灰		
12	59	北東部 第5層	陶器	甕	底部	—	[4.6]	[3.9]	施釉・不明文様	施釉・打伏の網 毛目文	[胎土]10YR8/2灰白 [釉薬]透明 [呉須・上絵]2YR6/2灰白	灰		高台付着 部・粗砂付 着
12	60	北東部 第5層	陶器	甕	胴部 ～底部	—	[5.4]	[5.6]	施釉・雲母 1本・草花文	回転ナデ	[胎土]10YR8/2灰白 [釉薬]5YR6/1灰白 [呉須・上絵]黄褐色	灰		
12	61	北東部 第5層	陶器	鉢	胴部 ～底部	—	[7.6]	[4.3]	回転ナデ・施釉	施釉・蛇の目 網目・網毛目文	[胎土]10YR7/3にぶい黄褐色 [釉薬]2.5Y4/3オリーブ系 [呉須・上絵]5Y5/2灰白	灰		

第3表 瓦観察表

掃因 番号	報告書 番号	遺構名/層位	種別	法量(cm)				色調(器面)	色調(断面)	調整	胎土	焼成	備考
				全長	幅	厚さ	瓦当厚						
7	33	南東部第3層	軒瓦瓦	[10.4]	[9.3]	1.8	1.6	凸面：N3/暗灰 凹面：N3/暗灰	凹面：黄目灰・指押さ る・ロゼキ灰 凸面：ナグ		黄 2mm以下の石莖・長 石・黒色粒含む	良好	連続三巴文
7	34	南東部表土層	軒平瓦	[7.7]	[4.7]	—	1.7	凸面：N4/灰 凹面：N4/灰	2.0V7/灰白 凸面：ナグ		黄 2mm以下の石莖・長 石・黒色粒含む	良好	半截花菱文
7	35	南東部第3層	軒瓦瓦	[5.7]	[5.5]	—	[1.3]	凸面：N4/灰 凹面：N4/灰	N6/灰 凸面：ナグ		黄 2mm以下の石莖・長 石・黒色粒含む	良好	連続三巴文
7	36	南東部表土層	不明	[6.1]	[5.5]	—	1.6	凸面：N4/灰 凹面：N4/灰	2.0V8/灰白 凸面：ナグ		黄 1mm以下の石莖・長 石含む	良好	花文・V字
12	67	南西部第5層	瓦瓦	[7.2]	[4.7]	1.3	—	凸面：N4/灰 凹面：N4/灰	N6/灰 凹面：ナグ・黄目灰 凸面：ヘラミダキ		黄 1mm以下の石莖・長 石含む	良好	

第4表 石製品観察表

掃因 番号	報告書 番号	遺構名/層位	種類	機種	石材	法量(cm)				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	
9	45	北西部第1層	石製品	砥石	不明(混岩?)	[5.1]	6.0	2.0	115.1	
9	46	北東部第3層	石製品	砥石	不明(変成岩?)	[5.0]	4.7	1.6	55.7	
9	47	北西部表土～第1層	石製品	玉輪磨(水輪)	凝灰岩	[31.0]	[26.3]	23.3	18.75kg	

写真図版



石積み①



石積み②



石積み③



石積み西面



石積み北面



S=1:40



石積み平面オルソ画像

北面



西面



S=1:20



石積み立面オルソ画像



発掘調査直前の飯田西 15 号塚



石造物検出状況



2018 年当時の飯田西 15 号塚



石積み上面の土層断面（東西方向）①



石積み上面の土層断面（東西方向）②



石積み上面の土層断面（南北方向）①



石積み上面の土層断面（南北方向）②



石積み上面の土層断面（南北方向）③



石積み上面の土層断面（南北方向）④



石積み内部の土層断面（西側）①



石積み内部の土層断面（西側）②



石積み内部の土層断面（東西方向）



石積み内部の土層断面（南側）



石積み内部の土層断面（北側）①



石積み内部の土層断面（北側）②



完掘状況



調査状況



I・II層出土土師質土器①



I・II層出土土師質土器②



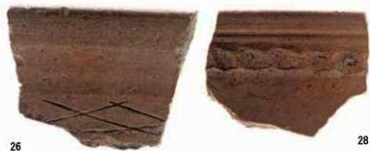
I・II層出土土師質土器③



I・II層出土灯明皿



I・II層出土備前焼とさな



I・II層出土土師質土器④



I・II層出土軒丸瓦



I・II層出土軒瓦





Ⅲ層出土土師質土器



Ⅲ層出土陶磁器・瓦

報告書抄録

ふりがな	いいだにし15ごうつか							
書名	飯田西15号塚							
副書名	飯田町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第262集							
編著者名	梶原 慎司							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2025 年 7 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
いいだにし15ごうつか 飯田西15号塚	かほけん 香川県 たかまつし 高松市 いっぺちよう 飯田町	37201	10107	34° 32' 21"	133° 99' 93"	2025.1.9 ～ 2025.1.31	40 m ²	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
飯田西15号塚	塚	近世以降		石積み		土師質土器 陶磁器		
要 約	今回の発掘調査では、塚の内部から 18 世紀中頃以降に構築された石積みを検出した。石積みは平面 L 字形で、北面は約 4 m、西面は約 5 m の長さを測る。残存状況が良好なところでは 6 段の石積みが残されており、高さは約 0.5 m であった。構築当初は石積みが四周を廻る方形石囲いであったと考えられ、墓地等の基壇として機能していた可能性が高い。							

飯田町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

飯田西15号塚

令和7年7月31日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 アイラックホーム(株)
高松市教育委員会
印 刷 有限会社 中央ファイリング

